う．芽鱗のはがれ方，枝の伸び方，葉のひろがり方，樹皮のはがれ方，葉の落ち方と，言われなれば見過ごしてしまうことがらが取り上げられている．花を見て名前を調べるだけが観察ではないことを，理解してもらうのによい本である． （金井弘夫）

□坂崎信之ほか：**日本で育つ熱帯花木植栽事典** 1,211 pp. 1998. アボック社. ¥59,000.

公園や花屋の店先の色どりが増したのは，花の万博以来のことだろうか．種苗の入手が以前より容易になり，折からのガーデニングブームも手伝って，植栽についての新しい知識の普及が望まれるときに，時宜をえた刊行物である．扱われている花木は294属2,236種類に及ぶ．まず約700頁（厚さにして半分）にわたるカラー写真と植物画で，それらが学名順に紹介される．続く300頁が事典篇で，同じ順序で特性や栽培について簡単な記述があり，品種についてはくわしく取り上げられている．とりわけわが国における植栽可能地域（後出）について，日本地図上に図示すると共に，各地での越冬の実績や花期についての記述がある．概説篇では花木の故郷である熱帯各地の環境と，植栽上の留意点が簡単に記されたうえ，植栽可能地域についてのくわしい説明がある．植栽可能地域（Hardiness Zone）は，米国農務省が年最低気温を基準にして植栽適温地帯を定義したもので，本書では各2区分をもつ3地帯が，ランタナ・ゾーン，デイコ・ゾーンなど，それらに代表的な植物名で名付けられている．わが国の Hardiness Zone の設定はこれが初めてのことではない．林弥栄・小形研三（1990）樹木アートブックI（アボック社）で，本書の著書坂崎と輿水肇によって，日本全国の気温記録，高度，経緯度のデータを処理して，8地帯12地区のクライメートゾーンが定義されている．これらのゾーンは植栽を目的として定義されたものであるが，自然分布を論ずる際にも参考とする価値は十分認められる．巻末に花木の導入年表，熱帯花木のみられる世界各地の植物園の紹介，各種の索引がついている．

（金井弘夫）

□酒井治孝（編）：**ヒマラヤの自然誌** 292 pp. 1997. 東海大学出版会. ¥2,000.

九州大学の市民公開講座をもとに，専門の異なる16人が執筆している．トピックは地質，気象，氷河，植生と利用，サルとヤク，水資源，災害，台所事情，健康，民族問題と多岐にわたって，今日的問題が語られている．地質構造を示すのに，食パンとハムとチーズと海苔とピーナッツを重ねた口絵のカラー写真が，なんとなく中をのぞいてみたい気を起こさせる．内容は統計表や図解を使ったかなり高度なものである．登山と観光トレッキングそれに NGO 花盛りのヒマラヤについて，もう少し広い予備知識と問題意識を得たい人におすすめする． （金井弘夫）

□吉田忠生：**新日本海藻誌** 25 ＋ 1222pp. 1998. 内田老鶴圃. ¥46,000 ＋税.

岡村金太郎先生の「日本海藻誌」の出版が1936年であるので，60有余年を経て増補改訂版ともいうべき「新日本海藻誌」の刊行である．扱われる種は「岡村：海藻誌」より約400多く，緑藻綱230種，褐藻綱308種，紅藻綱838種の計約1,375種に及ぶ．なおプランクトン性海産藻類は扱っていない．学名に関する命名上の規約を解説した凡例に始まり，綱の解説，目の検索；目の解説，科の検索；科の解説，属の検索；属の解説，種の検索，そして種の解説へと続く．各綱，目，科，属には命名者名，創設年，記載文のページが記され，また目，科，属にはそれぞれタイプ科，タイプ属，およびタイプ種の名が記される．属名がどのような意味をもつかについても解説がある．種の記述では，種名，著者名，記載年，記載ページ，和名，シノニムと続き，さらにこれまでに引用された主要な文献が挙げられ，また必要に応じて図の挿入がある．続いて種の特徴の記述，タイプ産地，タイプ標本の保存場所，地理的分布と続き，わかっているものについては深さの分布が記述される．また分類上問題のあるものについては解説が加えられる．文献は1997年までのものが67ページに亘って詳細に引用される．「岡村：海藻誌」以後に記録された種類も含め，日本産の全海藻を網羅するので，本書は海藻の同定

用であると同時に日本の海藻相の全貌を知るのに不可欠の出版物といえる．海藻を調査研究する人だけでなく，大学の図書館や海藻の調査研究に関係をもつ研究所や試験場等には必備の本である．（千原光雄）

□大阪府立大学総合情報センター：**中尾佐助文献・資料総目**　159 pp. 1997. 同センター（593 堺市学園町 1-1）.

1993年11月20日亡くなられた中尾佐助氏所蔵の，研究関連文献・資料の提供を受けた大阪府立大学総合情報センターが，そのすべてを情報化したリストである．同氏の蔵書については，すでに同学図書館に登録しているので，除かれている．文献，オリジナル資料（スライド，ネガ，ノート，テープなど），研究用資料（原稿，メモ，日記など），参照資料の4部から成る．冒頭に略歴，探検歴および梅棹忠夫氏による50年の交遊の回顧があり，故人の人柄がいきいきと描写されている．敗戦後はじめての，京都大学学士山岳会によるマナスル登山計画は，のちに日本山岳会による国家的プロジェクトになるのだが，中尾氏はその最初の学術調査隊に加わり，ただ一人で収集した膨大な標本類が，わが国のヒマラヤ植物研究の出発点となった．旅行記「秘境ブータン」によって，ヒマラヤの未知の領域への関心をかき立てられた人は多いだろう．中尾氏の提唱した照葉樹林文化という単語は，今や人口に膾炙している．「分類学の発想(1990)」では，広範な知識に裏付けられたユニークな議論の展開がみられる．そういう異色な人物の思考の元になった資料の一覧である．個人のコレクションが寄贈されても，そのすべてを整理するということは，たいへん面倒な問題が多く，なかなかできるものではない．項目の仕分けかた，見出しのつけ方などについても，参考になることが多いだろう．頒布についてはセンターに問い合わせられたい．（金井弘夫）

□Jones P. G. and Sutton J. M. (eds.): **Plant Molecular Biology; Essential Techniques** xvi+214 pp. 1997. John Wiley & Sons, Chichester, UK. £19.17; $28.80.

本書は現在使われている植物の分子生物学に関する実験方法のうち，最も重要と思われるものを学術雑誌や書籍から抜粋した実験テクニック集である．項目は，蛋白質や核酸の抽出に始まり，遺伝子構造の調査，転写の確認，蛋白質の視覚化による遺伝子発現の確認，クローニングや形質転換に必要な遺伝子操作，レポーター遺伝子の検出等による形質転換の確認など，遺伝子組み換え植物を作り出すまでの一連の実験方法が網羅されている．おのおのの項目は実験の種類ごとに概要とプロトコルが記述され，各プロトコルは試薬，設備，手順，注釈の4つの見出しに整理されていて，とてもわかりやすい作りになっている．また、各プロトコルはその出典が明示されているので，原典を参照するのにも便利である．（近藤健児）